

* 目次 *

第一部	日本人の心で読む聖書	
第一章	ことばといのち	11
第二章	聖書を読むにあたって	30
第三章	イエスの生涯	39
第二部	イエスの教え	
第四章	イエスの神・アッバ（父よ）	61
第五章	神の国・永遠の生命	84
第六章	キリストの生命 <small>からだ</small> 体	104

第七章	悲愛（アガペー）	132
第八章	幼子 <small>おなご</small> の心・無心	168
第九章	悲愛の突入	191
	あとがき——『日本とイエスの顔』をふりかえって	206
	《井上洋治アーカイブス》	
	〈本書に寄せて〉（北洋社版『日本とイエスの顔』より）	
	日本人司祭・井上洋治（遠藤周作）	218
	出会い（矢代静一）	220
	井上神父のこと（三浦朱門）	222
	〈エッセイ〉日本とイエスの顔（遠藤周作）	225
	日本の教父 井上洋治——神の「暖かさ」について（山本芳久）	230

〈井上洋治 人と思想〉①（山根道公）…………… 242

西歐キリスト教の仕立て直しの第一作出版まで——遠藤周作との歩みにも触れて

装幀 熊谷博人

第一章 ことばといのち

私には忘れられない一つの思い出があります。

私がまだキリスト教にも入信していない学生の頃ですから、もう四十年近くも前になるでしょう、秋のあ
る晴れた日、数人のカトリック信者の友人に誘われて、あるハンセン病病院を訪れたときのことです。

それは講堂での私たちによるつまらない劇らしいものが終わったあと、歩くとミシミシとなる、クレゾールの匂いのしみこんだ西日のあたる廊下を通って、ある粗末な木造の病室を訪れたときのことでした。今はもうよい薬もできて、病気も完全になおりますし、そのようなことはないのですが、当時はまだよい薬もなかつたので、生まれて初めてハンセン病の患者のかたがたと接した私には、短く刈り込んだ髪の毛と植えマツ毛のために男女の区別もよくつかず、皆が同じようなお年寄りの顔に見えてしまうのでした。いつもなんとなくおどおどしていた私は、二十歳のおじょうさんを六十歳くらいのおじいさんと見間違えてしまつてからは、ますますどうしてよいかわからないような状態になっていました。そのような私の気持を察してくださったのでしよう、反対に訪問者の私を慰めてくださるかのようにな、一人の患者さんが私にむかつて語りかけてくださったのでした。

中学校を卒業後、努力してある商売を身につけ、奥さんも迎えることができ、二人の子供にも恵まれたそのかたの幸福な日々を、ある日暗闇のどんぞこに突き落としたものは、そのかたにたいするまつたく思いもよらぬハンセン病の宣言だったのでした。

愛する家族とも別れなければならぬし、もう世間にもどって皆と楽しく映画をみたり酒を飲んだりすることもできないんだと思って入院当初はほんとうにたいへんでしたよ、淡々として語ってくださるその言葉の裏には、どんなに暗く深い孤独の日々の苦しみがかくされているのか、氷のようにコチコチに硬くなっていった私の心にもそれはよみとることができるような気がしました。

孤独というもののおそろしさ、それはまだ人生というものを知らないといつてよかった未熟な私の心にも、痛いほどよくわかりました。

フロムというアメリカの心理学者が、人間の持つているいちばん深い欲求は孤独からの脱却の欲求である、といっています、死への恐怖も、結局は孤独への恐怖につながるものではないでしょうか。

ハンセン病というものの真の苦痛は、その病そのものにあるのではなくて、その病が人を追いこんでゆく孤独のなかにあるのだ、なにか私はいまさらながら愕然とさせられた思いで立ちすくんでいたのです。

手は消毒液で必ずよく洗ってくださいね、そう注意した看護婦さんの言葉が、うつりはしないんだらうかという恐れとともに私の心に暗雲のようにひろがり、私の心のなかでは、絶対にそのような感情を外にあらわしてはならないという気持が、その恐れと烈しく交錯し戦い続けていました。

その場の空気をやわらげようとなさったのでしよう、「紅葉がきれいですよ、どうですか」、そうおっしゃって窓の外を、もう指もくつついてしまつてなくなつていようなこぶしでさし示されたときも、私にはその窓外の紅葉を美しいと感じる余裕さえなくなつていたのでした。

夜、ひとり別棟にさがつて、私は胸ふさがる思いで、灯のかすかにもれてくる病棟をながめました。自分の意志からではなく、まったくの運命のいたずらともいふべきものに左右されて、家庭も恋人もうばわれ、一生をこの土地に送らなければならぬ人たちの哀しみ^{かな}が、繰返し繰返し、怒濤のように暗闇のなかから私の心をゆすぶり続けるのでした。

こわいものにもふれるような態度しかとれなかった昼間の自分の姿に、深く自己嫌悪にとらわれ、寝つかれないままに、哀しみの潮騒しおぞらに心洗われていた私は、しかしふと、波打ちぎわに残された一片の桜貝にも似た、ある暖かな思いが、ポツンとその哀しみの波打ちぎわに残されていることに気づき始めたのでした。

それは、なにか、私はゆるされている、という思いにも似たものでした。

内心びくびくしながらも、表面上は何でもなさそうに振舞い、たった一日だけ友人のように強いいて行動しながら、翌日はほっとしたような思いで世間に帰ってゆく、そのようないわば偽善的な私をわかりながら、しかも、それでいいんだよ、とでも言っていてくださるような、あの年老いた病人のかたの姿でした。そしてそれと関連して、ふっと私のあたまをかすめたものは、ガランとした病室のベッドの上に置かれていた、うみで真もところどころくつついてしまっている聖書なのでした。

聖書とはいったい何が書いてある本なのだろうか、ろくに聖書に関する知識も持っていなかった私は、翌日、木洩れ日の美しい雑木林の中を、そんなことを考えながら歩いたのを今もはっきりと覚えています。

それが私の人生における聖書とのいわば初めての真の出会いであり、また同時に、私の人生をとらえ、私の人生を完全に変えてしまったイエス・キリストという人との出会いなのでした。

ふつう私たちがものを知るのには、二通りの方法があります。概念、言葉によって知る場合と、体験によって知る場合です。たとえば、スキーとはどういうものかを知るために、書物を開いて、一所懸命スキーに関する知識を集めるという場合と、実際にスキー場に行って雪の上を滑ってみるといえる場合です。スキーに関してたくさんの知識を持っている人は、スキーについてよく知っているといえます。しかしほんとうの意味で、スキーをよく知っている人は、実際にスキーを体験した人であるといえます。たしかに知識は役に立つものです。体験の手助けにもなるでしょう。しかし概念や言葉だけでは、そのものについて知ること

井上神父のこと

三浦 朱門

遠藤周作は井上神父が、単なる信者であった時代からの友人だったから、

「おい、井上」

と気軽に呼ぶ。私が神父と知りあったころは信者ではなかったから、まさか、

「おい、井上」

とは呼ばなかったが、精々で、

「井上さん」

くらいの言い方しかなかった。私たちは、人生とか真実といった問題を心おきなく話しあえる仲間だった。だから、神父であるか、文士であるかは大したことではないと思っていた。私たちの好みのテーマは幾つかあったが、その中の重要なものの一つは、この本でくりかえし論じられているカトリックと日本、普遍であるべき信仰と、特殊な条件のもとに存在する日本の心情の問題であった。

パンとブドウ酒をキリストの肉と血として理解することは、西欧人、というよりも、小麦がとれ、山にはブドウ畑のある土地では誠に自然なことであろう。しかし日本人にとって、パンもブドウ酒も、異国の、何やらエキゾチックな産物でしかない。そして四つ足ですら、食べることを拒んだ私たちの先祖が、キリストの血と肉をくらうことが、秘儀であると知ったら、身ぶるいして、キリシタン・バテレンこそは邪教に間違いないと断定したのは当然である。

禁教時代にかくれキリシタンになった人々は、ローマ教皇庁との関係が絶たれると共に、パンもブドウ酒も手に入らない。彼らは魚肉と清酒をその代用とする。また西洋の絵では無原罪の聖母を示すために、月——普通は三日月——を共に描く。つまり、雲と三日月、その上の聖母、という図柄をよく見る。それが長崎のかくれキリシタンの聖画では、三日月が舟に、雲が波になっている。

かくれキリシタンの運命は私たちの上に、いつまたどういう形でおこるかもしれないのだし、そもそも、南欧の人々が、パンとブドウ酒をさしたる努力なしに用意できるように、僅かな語学的訓練でキリスト教神学に接しうるのに較べれば、私は大きなハンディキャップを負っている。果して、これでいいのであろうか。

私たちは、たとえば、こんな風なことを話しあっていたのである。

遠藤周作の『沈黙』という小説を支える柱の一つは、井上神父をはじめとする、内外の聖職者たちとの交友の結果、うまれてきたものだ、私は信じているが、ある年の春、井上神父と遠藤と三人で、島原へ旅行したことを私は忘れ難い。レンタカーで借りた車は、時に、海を見下ろしながら、桜並木をぬけ、また緑の麦畑と、ベツタリ黄の絵具をなすりつけたような菜の花畑の間を走った。遠藤が言った。

「お前なあ、こういう道をだなあ、神父を先頭に、キリシタンの信者たちがお城に引きたてられていく。泣いているヤツ。怒っているヤツ。ふるえているヤツ。その後ろからなあ、ウソつき臭作という男がな、ついてきよんね。臭作はキリシタン調べの時、すすんで踏絵をして、十字架にしよんべんかけたヤツや、ところがな、親子兄弟、友人全部、引きたてられると、この臭作、気がとがめて、引きたてられてゆく連中のうしろを見えかくれについてゆくわけよ」「役人がチラと後ろを見ようものなら、臭作はガバと菜の花畑につつ伏してかくれるもんだから、顔は埃だらけ。そこに涙やら、鼻汁やらがまじってるから、キナコ餅みたいな顔になっとる。なあ、井上よ、お前なあ、こういう信者のための神父になつてくれ

〈エッセイ〉

日本とイエスの顔

遠藤 周作

井上洋治「日本とイエスの顔」を読んで、私はいささか感無量の気持を抑えることができなかった。この本は五十歳になった井上神父最初の本である、最初の本ということは五十年間彼が育て、噛みしめたものが、そこに注がれていると言いうことでもある。五十歳で処女作を書くという人がほとんど稀有になった昨今、五十年をかけて、はきだした処女作はそれだけの深みと、それだけの真実とを持つている。

私は二十代の中頃、井上神父と知りあった。昭和二十五年、仏蘭西に留学する船の四等室のなかで、現在、慶応の文学部長をしている三雲夏生と私とはリヨンの大学に留学する途上だったが、井上神学生はホルドオの近くのカルメル会に入会するために同じ船に乗ったのだった。話をきくと彼は東大の工学部に在学中、姉上の感化で洗礼を受け、哲学科に再入学、そして司祭になる決心をしたのだと言う。

あまり丈夫そうでもないその体と、彼のトレード・マークとなった額のあざとを見て（その額のあざはそれから二十年後、私は自らの「死海のほとり」の人物の一人にそのまま借りた。その人物の外貌は井上神父を考えながら書いたものである。もちろん、その内面は百八十度のちがいがあがある）私は井上が

神父になるのがふしぎな気さえした。カルメル会の修業のきびしさは私もかねてから聞いていたから、彼がなぜその会を選んだかもわからなかった。

我々はマルセイユ上陸後、たった半日、昼食を共にして別れねばならなかったが、一ヶ月にわたる同じ四等の船艙での、みじめで苦しかった生活がたがいの友情をいつの間にか育てていた。

私は彼より先に帰国した。戻ってきた井上神父とどこではじめて再会したか、今、どうもよく思い出せない。やがて彼は日野市の小さな教会の司祭となって、時折、ミサ用の何々を買うから金を寄附せよ、と三浦と私とに強要するのだった。私たちがある日、その教会をたずねると、四畳半のあわれな彼の部屋には「大関」の瓶がゴロゴロしていた。怒った三浦はもう寄附はしないぞと言いはじめた。俺は生涯独身なんだから酒ぐらい飲ませろ、と神父は答えた。

二十数年間の長い交際のなかで私は彼がしばしば日本人と基督教について語るのを聞いた。神父ではあるが友人でもある以上、私たちと彼との間にはかなり、危険できわどい質問や応答もくりかえされた。何でもこの神父にはうちあけられ、どんな信仰上の疑いでもたずねられるという安心感が我々にあったからである。イエスが人間の悲しみのすべてをわかってくれるのだと、ある日、彼が突然言った時、真実私は涙がでそうなほど感動した。

私が二度の手術に失敗して三度目の手術を待っていた病院に、ある日、見舞いにくてくれた彼は、しばらく私の顔を見ていたが、急に

「なア、あとのことは心配するな、もし万一のことがあっても安心して死ねよ。俺があとは引きうけるから」

とポツリと言った。その時は三度目の手術の危険さを覚悟していた時だったから、この心のこもった引導わたしの言葉はじんとう身にしみた。しかし私は照れて、まだ死ねるか、書きたいテーマがあるぞと

日本の教父 井上洋治——神の「暖かさ」について

山本 芳久

1 「礎石」としての『日本とイエスの顔』

井上洋治神父は、日本人の心の琴線に触れる仕方でもキリスト教を捉えなおした人物、と紹介されることが多い。それは間違いいではないが、井上神父の幅の広さを見失わせてしまいかねない言い方でもある。神父が最後に到達した境地として知られている「南無アツバ」という祈りも、「南無」が「帰依」を意味するサンスクリットで、「アツバ」が「お父ちゃん」を意味するアラム語であるということを考えて入れると、日本回帰的な祈りの在り方だとは簡単には言えなくなってくる。日本人の心の琴線に触れるキリスト教の在り方を求めて東西のあらゆる思想を涉猟した井上神父の思索の歩みは、「日本の神学」の確立の歩みと言うよりは、むしろ、「日本における神学」、もつと言え、日本人によって、日本語で形成された多文化交流的な神学」とでも言うべきものなのである。井上神父の著作群のなかには、「日本的な神学」というような狭い観点によっては読み尽くせない豊かな可能性が眠っている。記念すべき井上洋治著作選集の刊行にあたって、まずそのことを指摘しておきたい。

本巻に収められているのは、井上神父の主著であり処女作である『日本とイエスの顔』である。「作家は処女作に向かって成熟する」という言葉があるように、井上神父の後の歩みのすべてがこの処女作に凝縮し

ている。一九七六年に北洋社から刊行された本書は、一九八一年に講談社から出版されることになり、一九〇年に日本キリスト教団出版局から最終版が刊行された。その最終版の末尾に付された「あとがき——『日本とイエスの顔』をふりかえって」において、神父は次のように述べている。

じつくりと今一度この書を読み返してみ、改めて私は、この書こそが私の思想と生活の原点であることを確認した思いであった。

『日本とイエスの顔』を初めて北洋社からだしてもらって以来今までに、私は十冊あまりの本をかいているが、これらの本はみなこの『日本とイエスの顔』という礎石の上に重ねられていった積石に他ならない。

(本書209頁)

神父は、このあとがきを書いてから更に二十年あまりの生涯を全うされたが、最後までこの思いは変わらなかつたであろう。

今回、解説執筆のためにあらためて『日本とイエスの顔』を読みなおしてみ、驚いたのは、後に井上神父のキーワードの一つとなる「汎在神論」^{パンチンイイズム}が、処女作である本書においては全く登場していないという事実である。生前に刊行された神父の最後の著作である『イエスの福音にたたくむ』(日本キリスト教団出版局、二〇〇八年)においても、この概念は登場しない。

それに対して、『日本とイエスの顔』の第二部「イエスの教え」の最初の章である第四章は「イエスの神・アバ(父よ)」「本書では「イエスの神・アッバ(父よ)」と題されており、晩年の「南無アッバ」にまで続いていくモチーフが既に本格的な仕方で開催し始めている。

井上神父の歩みは、まさに、処女作である『日本とイエスの顔』に回帰しながら、その中に含まれていた

〈井上洋治 人と思想〉①

西欧キリスト教の仕立て直しの第一作出版まで
——遠藤周作との歩みにも触れて

山根 道公

ここでは本巻の「解題」と、著者井上洋治が四十九歳で処女作『日本とイエスの顔』を刊行するまでの人生と思索の歩みを記す。

* * *

『日本とイエスの顔』

『日本とイエスの顔』は、一九七六年、北洋社より書下ろし作品として刊行される。著者四十九歳の処女出版である。神父が書いたキリスト教の一般書としては異例なほどに好評で、版を重ねるが、出版元である北洋社の出版業廃業により、一九八一年、講談社より新装版が刊行され、版を重ねる。一九九〇年、さらなる新装版が、日本キリスト教団出版局より刊行される。その際に著者は、十四頁におよぶ詳細な「あとがき——『日本とイエスの顔』をふりかえって」を付して、刊行以来寄せられ

た批判に応える。本巻の本文には、その「あとがき」が付されている。

最初の北洋社版には次の「まえがき」が付されていた。著者の処女作執筆の背後にある心境が述べられた重要な文章であるので、長い引用となるが、全文を掲載する。

ヨーロッパでの共同生活が長かつたせいか、あるいは私の育ってきた環境や性格のせいかな、私自身にもよくわかりませんが、「日本人とキリスト教」という課題は、夢中でキリストを追い求めてきた私の人生にいつも大きな壁として立ちふさがってきいていたような気がします。

真夜中の祈りを終えて自分の部屋へ帰る途中で、月の光を浴びて美しく輝いている南仏ポルドー付近の広いぶどう畑を眺めたとき、あるいは、雨の日にリヨンの街の巨大なカテドラルの前で射すくめられたように長い間立ちすくんでいたとき、いつも強く私の心をとらえたものは、入ろうとしても入ろうとしても、いつもはじき返されてしまう重いヨーロッパ文化の大河のような流れでした。

フランスの片田舎の食卓にならべられた赤葡萄酒の色にも、山村のさびれた、少し崩れかかった教会堂